

ゾウ化石研究が明らかにすること

北川 博道

はじめまして。4月からお世話になっている北川博道です。どうぞよろしくお願ひいたします。



アジアゾウと私
(上野動物園にて)

専門は古脊椎動物学、特にナウマンゾウやマンモスなどのゾウ化石を中心に研究をしています。ゾウ化石は日本で最も多く見つかった脊椎動物化石で、もちろん埼玉県からも見つかっています。古いものからアケボノゾウ、トウヨウゾウ、ナウマンゾウの3種類が見つかったのですが、このようなゾウ化石は、日本にやってきては消滅し、やってきては消滅するということを繰り返し、一度に複数種が存在することは基本的に無かったといわれています。加えて、ゾウは、移動と共に多くの他の動物を引き連れるといわれています。つまり、化石ゾウたちはその都度、多くの他の動物を引き連れて過去の日本にやってきたのです。私はこのようなゾウ化石を研究することによって、日本の現在の生物相の成り立ちを明らかにしようとしています。

埼玉県から産出している化石は部分的な標本が多いのですが、ひととき素晴らしい標本があります。アケボノゾウ狭山標本です。地学展示

ホールの最後に展示されている標本です。アケボノゾウは日本でしか化石記録がなく絶滅した日本固有種です。ゾウの中では小型で、肩の高さが大人の背丈くらいのゾウでした。実はこのゾウは倍近く大きなゾウから進化したと考えられているのです。このように、元々大きかった生物が小さくなることを矮小化といいます。島などの閉鎖的な環境の生物によくみられる現象なのですが、その化石として最も代表的なのがイタリアのシチリア島などでみつかったファルコナーゾウ（下写真）です。



ファルコナーゾウと私
(イタリア、ローマ大学にて)

なんと大人になっても肩の高さが1m程度の非常に小さなゾウです。私の後ろの2体は大人です。しかし、このゾウも4mを超える大きなゾウから進化しました。このようなゾウがどのように、なぜこれほどまでに小さくなったのか、その謎を解くヒントが私は狭山標本に隠されていると考えています。埼玉の大型化石というと、どうしても新第三紀の海の生物たちが有名ですが、陸の動物にも世界に誇れる素晴らしい化石があります。このような今は無き生物たちの謎を一つ一つ解きながら皆さんにご紹介できればと思っています。これからよろしくお願ひいたします。

(きたがわ ひろみち・学芸員)